

「コウナイの石」・4

～雲をつかむような話～

東光部 土井眼科 土井 治 道

雲をつかむような話、と言う表現があるが「コウナイの石」はそのようであり、拙文第2話～第3話は、まさにこの表現がピッタリの話だと自分でもそう思う。雲の正体は、水蒸気が空中で凝固した小さな水の粒であるらしいから、科学的に捕らえ所がない訳ではない。ところが「コウナイの石」はどうだろうか。おそらく前文をご精読くださった方でも、その大多数の方に石の表情が見えていないのではないかと私は恐れます。見えていない方にとって、今までの私の文はいったい何でしょう。空想？錯覚？「そんなものじゃあない！」、幻視、幻覚、精神病！。

視覚について

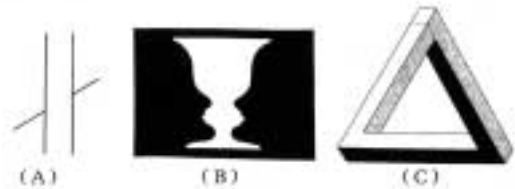
「モノを見る」とは、一体どういうことなのか？ 目や視神経や視覚中枢だけで見えるのか。両眼視差や調節による立体的認識は何処でどのように関与するのか等々。H12年の夏、私はこれらの事を少しでも知ろうと思い、神戸のD百貨店での「M.C エッシャーの絵画」などの「だまし絵の展覧会」に行きました。「エッシャーの絵画」の代表作は、「建物の上の矩形の水路を流れた水で、永遠に回る水車の絵」と云えばお分かり下さるかと思えます。この展覧会には絵画だけでなく色々な立体の展示物が有り、興味津々でありました。

イリュージョン（幻想・幻影・錯視）とは、誤った視覚です。空想とは、正常人の誰でもがする有り得るはずのない事を想うこと。想像とは、現実の知覚を伴わずに心の中に物事の心像を想い描くことです。「コウナイの石の顔」は、これらの内のどれでしょうか。それとも、また別のモノなののでしょうか？

「モノを見る」ということは、外界から網膜までの光学系的過程と視覚中枢までの神経生理学的過程のみならず、三次元の外界を認識するという心理学的過程を要します。つまり、網膜像から三次元の外界を推定することは、光線とは逆方向の推論だとされています。その「外界の推論」と実在とが多くの場合に一致する。不思議です。そんなことが脳の何処で、どのように為されるのか？「お前は何か解かっとらんなあ！」と、私が無知であることを「コウナイの石神」は教えてくれました。

（立体視覚中枢＝19野。40野？前運動野？：不二門 尚先生：阪大）

錯視について



(A) 幾何学的錯視の例（斜線が段違いに見える？）
 (B) ルビンの壺
 (C) 不可幾何形の例（ペンローズによる）

図1

イリュージョン（広義の錯視）には2種類あると思います。一つは病的なもの（幻視・妄想 - - 薬物などによるものも含めて）、一つは誰にでも生じるもの（錯視）。病的なものはさておき、誰にでも生じるイリュージョン（狭義の錯視）には、単眼性、両眼性、それに空間移動によるものなどが有るのではないのでしょうか。

- ・単眼性のものには幾何学的な錯視（図 - 1 A）や明暗の差による錯視、例えば「ルビンの壺」（図 1 - B）等があります。「ルビンの壺」は黒の像を認識するとき白の像は消え、白の像を認識するとき黒の像は消え、二つの像の同時認識は出来ないようです。その他にホロスコープなども単眼性のイリュージョンでしょう。もっと簡単に「鏡の中の世界」だって、考えればイリュージョンではないでしょうか。
- ・両眼性のものには立体映画や、ランダムドット・ステレオグラムや、3D写真があります。
- ・移動による錯視の例は「夜道を何処までも付いてくるお月さま。」だと思います。

「石の顔」は実在!?

「コウナイの石の顔」はイリュージョンでしょうか？そうでは無いのです。「石の顔」は上記のどれにも合わないのです。「石の顔」は解り難いけれども実在なのです。「見えない人」は、注意力と感受性が低いだけでしょう。（前報の濃度差増強のコピー図で顔の表情が見えた人も多いハズです。）



3D写真「コウナイの石」南西面
を左眼で 右眼で見て立体視
（石の顔は実在。立体像はイリュージョン）

両眼視の意義

両眼視の意義は、主に立体視にあると思われませんが、両眼視機能を有するのはフクロウなどの猛禽類と哺乳類の一部だけとされず。カタツムリは・・・？

生物の進化の上で餌や敵をいち早く見つけ出し、サバイバルに役立つのは、三次元的な知覚のみならず、マトマリの認識などを通しての「カムフラージュ破り」にあると云われています。そこで、3D写真が有用となります。

だまし絵

絵画を見ていて思ったのですが、二次元のものを絵（二次元）に描くこと（例えば複写）は比較的に簡単でしょう。絵画というものは一般的には三次元のを二次元に創るもの。エッシャー等の「だまし絵」は三次元では作ることが不可能な立体を二次元の絵画に描いたモノでしょう。ここに違和感と興味を感じるのでしょうか。すなわち、実体が有り、それを特殊な方向から見た時のみ、そのような絵が成立する - - 不可能図形（図 1 - C）

だとすれば、四次元の世界のヒトは三次元の物体を創ることが出来るということです。しかも簡単に。「コウナイの石の顔」はこれではないかと思うのですが如何？。すなわち（四次元のヒト）= 神様が作った。 - - そんなバカな！非科学的すぎます。

「石の顔」は天然か

では、「石の顔」は天然の「自然の偶然の産物」でしょうか。これを肯定する考え方はとてもオカルト的だと思います。なぜなら南面の顔には上下の眼瞼や黒目白目の区別が有り、しかも笑い顔、泣き顔、怒り顔。

それに北の海上からだどクロクのようにも見えるのですから。「誰かの近年の作品」でしょうか。そうではないとするなら、(上野忠彦氏の古代人説と同様に?) 播磨国風土記の記載を信じて「より昔の古代人が作り?、応神朝に新羅人が細工をした」と考える方がマトモな考え方なのではないでしょうか。どうでしょうか?



ドクロクのような「コウナイの石」北側海上より

まとめ

「コウナイの石」を考えると、私は冴え

渡る厳寒の夜の「昴」を見上げる視線のように真っ直ぐに考えようと思いました。しかし私の住む星(地球)は太陽の回りを公転も自転もし、宇宙の中で太陽も高速で移動している為か、スパイラルを描くのみならず細かく揺れ動くのであり、結局、考えがまとまらないのです。結論はそう直ぐには出ないでしょう。すぐに解答が出ない方が楽しいのではないのでしょうか…… つづく。

@参考文献:「視覚の冒険(視覚心理学)

下條信輔(産業出版)

(2000、秋記)

報告: 姫路文学館における「風土記が語る古代播磨展」(2000. 10~11)にて、シンポジウムの後「神嶋の西辺とは家島町上島とも西島ともいわれ、その神像の目が新羅人に奪われた。」と、訂正の再表示がありました。

従来通説は、「神嶋=上島」です。

恵まれた自然と史跡との共生を

大津部 美野内科医院 美野正樹

診療の手を休め、ふと窓の外を見ると、向かいの家々の間から京見山の四季折々の風景が目に入る。

なんだか、とてもほっとする瞬間である。

私達夫婦は、昨年暮れから21世紀の始まりに掛けて1300キロのバスの旅をして来た。いつもながら、どんな所を廻るのかも知らず、ただ妻の決めた計画に付いて行くだけであったが。

今回は、能登和倉から輪島金沢を経て五箇山白川郷を巡り、飛騨高山、蓼科、南八ヶ岳の横岳、諏訪等のふるさと豊かな自然と歴史探

索コースだった。

季節柄どこも雪ばかりだったが、雪はより一層自然と郷愁を感じさせてくれるものに成った。

能登には平家の落人達が現在の25代目にいたるまで守り続けている上時国家があり、1808年に建てられ入母屋造、茅葺、唐波風造の玄関を持つ重厚な屋敷で、そこかしこには平家を誇る定紋揚翅蝶を配している。今なお観光用の為不便な生活を強いられている様だが、たまにしか見ない我々にとってはどこかで見た様な懐かしささえ感じる佇まいであ